



司会からのコメント

杉山 直

〈名古屋大学大学院理学研究科 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町〉

基幹大学の現状をデータに基づいて緻密に講演された江里口さん，教育系大学の困難な状況をユーモアを交えながらしかしまじめに語った福江さん，どちらのお話もたいへん興味深いものであった。特におもしろく思ったのが，置かれている状況は大きく異なるものの，お二人とも「天文に来る学生はそんなに大きく変わっていない」という結論を述べていたことである。理科離れは進んでいるが，天文はまだ人気を保っている。頼もしいといえよう。これは天文学のわかりやすさとはもちろん無縁ではない。冥王星の騒ぎであれだけマスコミが騒いだことを思い出していただきたい。あれが，例えば「陽子が素粒子ではなくなりました」というニュースであったとしたら，果たして取り上げられていただろうか。

では，われわれ天文学者は当面は安心してよいのだろうか。私には天文学よりもむしろ，基礎科学全般，特に物理学の地盤沈下が大きな問題であるように思われてならない。天文学に対する情熱

はもっていても，物理学の勉強を全くしていないとか数学がまるで苦手，という学生では，カルチャーセンターで教えるような表面的なおもしろさしか伝わらないだろう。また専門的な研究に取り組む際の困難も容易に想像できる。私の勤務する名古屋大学でも，伝統ある物理学科ではあるが，近年は定員割れを起こしている。基礎科学の復権がなければ，科学全般が結局は沈んでいってしまう。

基礎科学とそれを巡る教育をどのように復権させるのか，という大問題を論じるには字数も足りず，また私の手に負えるものでもない。一つだけ言えることは，この問題は大学だけに閉じてはいかず，高校や入試のシステムなどとも密接に関連しているということだろう。天文学会としても，天文教育を含む基礎科学教育について，教育委員会を中心に関連諸学会との連携も視野に入れつつ，これからも取り組んでいくことが重要となろう。